

第69回淀川水系流域委員会を傍聴して感じたこと

2008年1月6日

近藤ゆり子

木曽川水系揖斐川流域住民

「徳山ダム建設中止を求める会」事務局長

〒503-0875 岐阜県大垣市田町1-20-1

約1年ぶりに淀川水系流域委員会を傍聴しました。何回か傍聴申し込みをしましたが、足を運ぶことができないでいました。第Ⅲ期に入ってから初めの傍聴です。

さまざまな感想がありますが、一番強く感じたことを、まさに「感想」として述べます。

「川上ダム」が議題でした。

T委員(京大防災研究所)は「移転された方々の心のケア」云々という発言をなさいました。「ダム建設を中止すると移転された方々の心が傷つくから中止は難しい。中止すべきではない」というベクトルの発言と感じました。

今、試験湛水で水底に沈みつつある徳山村を見続けて来た者として心底腹立たしく思いました。

マスコミや行政に対しては、「苦渋の選択をした人」ほど、「一刻も早い完成を願う」と言うのです。そこにどんな心の痛みと屈折があるか。本当の意味で「苦渋の選択で移転した人」と向き合ったことがあれば、「苦渋の選択で移転した人はダムの早期完成を願っている」といったステレオタイプの意見は言えないはずで

1995年暮れ、建設省の「中止を含めて見直す」という徳山ダム建設事業審議委員会の立ち上げを機に(おびき出されて、というべきか?)、私たちは「徳山ダム建設中止を求める会」を立ち上げました。

地方都市です。大垣市長が率先して推進する徳山ダムの建設中止の声を上げることは、周囲に奇異の目で見られるだけではありません、大垣市は行政として嫌がらせを行ってきました(提訴し、勝ちました)。しかしこうしたことは別に苦痛ではありません。

「徳山ダム建設中止を求める会」を立ち上げにあたって、私たちが一番逡巡したのは旧徳山村住民の気持ちのことでした。460余世帯がすべて移転補償に応じ、徳山村は1987年3月に廃村となっていました。もう元からあった家は全村で数軒しかない、ほとんどの家が取り壊されていました。私たちの声は「遅すぎた(中止を求める)声」なのです。

旧徳山村住民からは罵倒されることになるだろうと予測できました。「罵倒されても逃げない」、立ち上げたからにはその覚悟はしました。集団移転地などにも頻繁に足を運び、いろいろな方と接し、話をしました(その働きかけをやったことで、土地トラストの権利取得ができました)。

そうした経緯を経て「ステレオタイプ発言=『苦渋の選択で移転した旧村民はダムの早期完成を願っている』というのを垂れ流す行政や学者は、傲慢なのか怠惰なのか、本当のことを知ろうとしていない(でなければ意図的な嘘を言っている)」と断言できます。

「故郷を水没させるという大事にあたって慎重に補償交渉を進めるべきだ」とした人も、最終的には補償交渉に応じて移転しました。私たちが立ち上がったときには、表向き「ダム反対」を口にする旧村民はいなかったのです。

しかし、「ダム」を積極的に容認し早期の補償交渉妥結に動いた人も、単純に「ダム推進派」ではありませんでした。「下流住民のためだ、ということで苦渋の選択で故郷を離れた。今頃になってダムを中

止するなどとは許せない。ダムは早期完成を願っている」とマスコミの前や公の席で繰り返し述べていた人の中に、水面下で私たちを何かと助けて下さった方もおられました。「推進」を掲げた人も、「慎重（反対に繋がる）」を唱えた人も、先祖伝来の土地を手放すに至る胸中には、その表面的言辞ではとらえられない複雑なものがあるのです。

今、徳山ダムは試験湛水中であり、(元々湛水線以上にある一集落跡を除き)村落跡は水没しました。試験湛水が始まり、集落が水没してから、旧徳山村幹部として補償交渉の窓口を務めた方が、事業者らを訴えています—「約束が破られた」と無念の思いを込めて。(「地方の時代」映像グランプリを受賞した東海TV制作「約束～日本一のダムの奪うもの～」をご覧ください)

徳山村を承継した藤橋村(現・揖斐川町)幹部でダム対策にあたった方も、07年暮れに事業者を提訴しています。

これらの方々は、行政マンとして徳山ダム問題に向き合ってきたのです。決して「ダム反対運動」をしてきたわけではありません。こうした方をして「裏切られた。約束を反故にされた」と感じるようなことを、国・事業者(水機構)は行い続けてきたのです。

ダムが完成しようと中止になろうと、かけがえのない故郷を奪われたしまったという心の痛みは「ケア」などしようもないのです。

川上ダムを中止としたとき、移転住民に「精神補償」を行うことに、私は反対しません(「前例がない。不公平だ」という意見は多々噴出するでしょうけど)。それは「ダムを作ったら安らかであったろうに、中止することになったから申し訳ない」という意味ではありません。作る必然性がないからこそ長らくダムは出来なかった…必然性のない「ダム」によって、それぞれの方の人生を翻弄してしまったことへの謝罪は必要だと考えるからです。

淀川水系流域委員会委員の皆様、そして河川管理者側の方々、事業者(水資源機構)の方々に訴えます。

「苦渋の選択で移転した人はダムの早期完成を願っている」といったステレオタイプの意見を「川上ダムは中止できない」理由に使わないで下さい。それは人が belong to する土地(歴史・暮らし・風土)を知ろうとしない浮薄な議論です。他人の「気持ち」を慮る素振りで自らの責任を逃れる狡猾な手だと非難されても仕方のないやり方です。

水資源機構ダム(=水資源開発ダム)川上ダムは要らない。丹生ダムも要らない。

水資源開発事業として建設された長良川河口堰、そして徳山ダムが要らないのと同様に。

PS:全く偶然ですが、「徳山ダム建設中止を求める会」を立ち上げの数年前のある晩秋の日曜日に、丹生ダムで集落ごと移転した驚見での離村式に遭遇してしまいました。

大垣から揖斐川を遡り、もう本郷地区にも数軒しか家は残っていない、そんな旧徳山村を抜け、高倉(こうくら)峠から今庄に行きました。いつもは北国街道を椿坂峠へと抜けるのに、その日は気まぐれで中河内から高時川上流に入りました。いくつかの家の痕跡…「水資源開発公団」の看板を見て驚きました。「徳山ダムで終わりかと思ったら、まだ他にも水資源開発ダムを作ろうというのか?!」

後から思うとこれもまた「運命」だったのかな、などと……